

不妊治療専門施設における一般不妊治療後妊娠症例の周産期予後

Perinatal prognosis after natural and medicated timed intercourse and artificial insemination of husband in an infertility treatment facility

小宮慎之介[1] 井上朋子[1] 福田愛作[2] 森本義晴[1]

[1] HORAC グランフロント大阪クリニック

[2] IVF 大阪クリニック

## 背景

不妊治療施設における治療周期は増加の一途を辿っている。ART（assisted reproductive technology）については、予後調査が制度化されているが、一般治療において予後調査は制度化されておらず、その全体像を把握しきれていないのが現状である。

## 目的・方法

2005 年 1 月から 2017 年 12 月までの 13 年間で当院における一般不妊治療で臨床的妊娠に至った症例のうち、一般不妊治療の周産期予後について検討した。

## 結果

上記期間中に臨床的妊娠に至った全 8163 例中、2153 例（26.4%）は一般不妊治療によるものであった。自然妊娠は 160 例、タイミング療法は 1243 例、人工授精は 750 例であった。不妊原因は多岐に渡るものの、自然妊娠例には多嚢胞性卵巣（PCOS）や卵巣機能不全のような排卵障害を引き起こす症例は認めなかった。不妊治療において重要となる多胎妊娠については、全臨床妊娠中 612 例（7.5%）、一般不妊治療後臨床妊娠 2153 例中 38 例（1.8%）に認められた。内訳は自然妊娠で 0 例、タイミング療法で 26 例（DD 双胎 20 例、MD 双胎 4 例、MM 双胎 2 例）、人工授精で 12 例（DD 双胎 7 例、MD 双胎 1 例、MM 双胎 1 例、品胎 3 例）であった。タイミング療法後多胎妊娠 26 例中の 27%（7 例）、人工授精後多胎妊娠 12 例中の 67%（8 例）で排卵誘発剤を使用していた。帝王切開率は、自然妊娠 107 例中 34.6%（37 例）、タイミング療法 975 例中 20.2%（197 例）、人工授精 599 例中 20.2%（121 例）であった。

## 考察

当院は ART 施設であるが、一般不妊治療で妊娠する可能性のある症例については、一般不妊治療での妊娠成立を目指している。PCOS 症例や卵巣機能不全症例では、排卵障害のために自然妊娠の可能性が低く、排卵誘発剤を使用した上でタイミング療法や人工授精が必要になる症例が多い。クロミフェンによる排卵誘発が一般的であるが、症例によっては過排卵を認めることがあり、多胎妊娠、帝王切開率の上昇の一因となっている。過排卵を認める症例では、排卵誘発剤の変更（シクロフェニル、レトロゾール、低容量漸増 FSH など）を検討し、適切に避妊を指示する必要がある。自然妊娠例の多くは合併症を有さず、85.6%（137 例）は不妊原因も不明であったが、帝王切開率は全国統計に比較して高率となった。妊娠成立時平均年齢がやや高く（34.8 歳）、貴重児であることなどが背景にあると予想された。ART 症例に限らず、一般不妊治療症例についても周産期予後を把握し、多胎妊娠率、帝王切開率を下げる工夫を継続する必要があると思われる。